

カントの宗教批判—祭祀について—

村野 宣 男

Kant's Criticism of Cult

Nobuo Murano

拙論「カントの宗教批判—迷信について—」¹において、カントの宗教批判の基本的構造の考察を試みたが、本論においては、教会で行われる祭祀の批判をみる。カント (Immanuel Kant, 1724-1804)によると、迷信的思考法は、理性に反するとしており、理論理性と実践理性に対応するところの物理的迷信と道徳的迷信に言及している。『単なる理性の限界内における宗教』(以下、『宗教論』と略)では、道徳的迷信と祭祀的行為は同一視されている。

『宗教論』では、特に第四編において、祭祀批判がなされる。教会での祭祀は、反道徳的であると批判され、信者の現世利益の意志ばかりではなく、教会の墮落も指摘されている。『宗教論』の出版は、官憲によって拒否されたが、大学を通しては可能であったので、イエナ大学でなされた(1793)。しかし、国王(フリードリッヒ2世、1786-97)の圧力の下に、宗教に関する著述ならびに講義が禁じられたのである。現代においても、宗教教団に関する批判には多くの抵抗が予想されるのであり、カントの批判哲学精神のダイナミズムを知ることが出来る。

カントは道徳的宗教を主張するのであるが、宗教が道徳的であるとか、道徳が宗教的であるといっているのではない。道徳は理性的なものであり、宗教とは別の次元にある。カントが強調するところは、宗教的であるためには先ず道徳的でなければならないということである。宗教的救済は、道徳的であることが

先行して初めて可能であるとする。この意味で、カントは道徳的あるいは理性的宗教を標榜する。したがって、道徳的態度が先行しない宗教的行為を誤ったものとして徹底的に批判する。すなわち、祭祀的行為が批判されるのである。

本論においては、祭祀に関わる典礼・法規などの言葉の意味を検討し、さらに祭祀的思考法の構造を見る。次に、祭祀と対置される道徳的宗教の概念を考察する。最後に、道徳的宗教がもたらす意義と問題について簡単に触れることとする。

1. 祭祀・法規・典礼

『宗教論』第四編第二部は、「法規的宗教 (statutarische Religion) における神への偽奉仕 (Afterdiest) について」と題されて、次のように始まる。“唯一の真の宗教は次のような規則を持つ。それは、実践的原理であり、その原理の絶対的必然性は理性によって(経験的ではなく)認識されるのである。教会は一樣によき形式を持っているのであるが、教会のためには法規 (Statut) が存在する。それは、神的とみなされた指示であるが、われわれの純粹なる道徳的判断にとっては恣意的であり、偶然的である。このような法規的信仰 (statutarischer Glaube) (これは、おおかたある民族に局限されていて世界的宗教を包含することは出来ないのであるが) を神への奉仕に本質的なものと考えたり、神意を得る

ために人間に課せられた最高の条件であるとするは宗教的妄想 (Religionswahn) である。宗教的妄想に従うことは偽奉仕であり、神に対しての誤った崇拜であって、神自身によって要求された真の奉仕から遠ざかる行為となるのである。”² この文章は第二部の序文とみなされるものであり、ここには宗教批判のキーワードたる法規・妄想がみられる。

法規・法規的という言葉は、日本語では法律に関わるものである。原語ではStatut・statutarischである。Statutの意味は、WahrigのDeutsches Wörterbuch³によると、Satzung, Gesetz, Ordnungとされており、用例ではVereinsstatutがあげられている。DudenのDas große Wörterbuch der deutschen Sprach⁴によると、Satzung, Festgelegtes, Festgesetztesとされ、die Organisation eines Vereinsに使われるとされている。すなわち、Statutとは社会全体に関わる法律のようなものではなく、趣味のグループの会則の意味を持つ。教会は、社会における宗教グループたるものであり、そこには規則あるいは‘決まり’がある。信仰にも形式としての決まりがあり、その決まりに従うものが、statutarischer Glaubeとなるわけである。カントが、Statutで意味しようとしていることは、理性的普遍的なものではなく、恣意的な性格を持った歴史的個別的なことである。カントのよれば、このような決まりは、反道德的動機に支配されることが多く、真の信仰は普遍的理性によらねばならないとするのである。

さて、statutarischという言葉をどのように訳したらよいか問題である (『宗教論』には、Statutと言う語は見当たらない)。理想社の『カント全集』⁵では、「制規的」とされ、岩波書店の『カント著作集』⁶では、「制定的」とされ、同じく『カント全集』⁷では、「法規的」とされている。いずれの訳語も、特殊グループ (Verein) の‘決まり’と言う意が表されていない。「制規的」と言う言葉は、聞きなれないものであり、「制定的」は包括的

過ぎる。「法規的」は、法律的響きが強いが、比較的妥当に思われるので、この訳語を本論では採用する。

つぎにObservanzと言う語をみる。“誰でもができる行為によってよき人間になる必要なしに、神の意に適わんとすることは迷信的妄想である (例えば、法規的信条を告白することあるいは教会のObservanzや慣習を遵守することによって)”⁸と言われる。カントは、Observanzと言う語をたびたび使っており、“神への祈願の形式、報酬を求める信仰の告白、教会のObservanz”⁹のように、三者を同一視している。ユダヤ教の割礼と思われる行為を“痛みを伴うObservanz”¹⁰と表現している。本来、Observanzと言う言葉は、14世紀に、修道会フランシスコ会において創立者アッシジのフランチェスコ (Francesco, 1181/2-1226) の修道会会則に厳格に従うグループのObservantから来たものである。Observantは研究社の『新カトリック大事典』¹¹では「原会則派」とされている。したがって、Observanzは、厳密に規則を守る意味となる。この語の訳語を先に参照したところで見ると、理想社の『カント全集』では「典礼」、岩波書店の『カント著作集』では「慣行」、同『カント全集』では「厳律」とされている。「典礼」は、教会儀礼ならびにその規則を指すLiturgieの訳語である。カントはObservanzと言う語を、本来の意ではなく厳格に教会儀礼に従う意味で使っている。したがって「典礼」の訳語がふさわしいと思えるが、カントは、あえてObservanzと言う語を使って、厳格に典礼に従う意を表そうとしたのである。因みに、カントはLiturgieと言う語を『宗教論』において使用していない。

法規的典礼による教会儀礼は祭祀 (Kultus) と呼ばれており、“単なる祭祀と典礼の宗教 (eine Religion des bloßen Kultus und der Observanzen)”¹²と言う表現が見られる。“祭祀という宗教的行為によって神の前での義にたいして何物かをなすことが出来るとする妄

想は迷信 (Aberglaube)¹³であるといわれる。神に対する偽りの奉仕 (Afterdienst) がなされる教会儀礼は祭祀である。

なお、『宗教論』では、「礼拝」を意味する Gottesdienst という語が六箇所使われている。しかし、カントはこの語に「礼拝」と言うよりは「神への奉仕」と言う意味を持たせているように思われる。理想社の『カント全集』と岩波書店の『カント著作集』では「神への奉仕」、岩波書店の『カント全集』では「礼拝」とある。カントは、教会の礼拝に一般に使われている Gottesdienst という語の代わりに、より批判の意をあらわすために、Observanz や Kultus のような、どちらかと言うと秘教的 (esoteisch) な意を持つ語を使用していることに注意すべきであろう。

2. 祭祀批判の構造

カントは、法規的典例に従うものとしての祭祀を批判するのであるが、この批判はどのような論理を持つのであろうか。カントによると“迷信とは、自然的経路で生じたものではないと考えられるものに、自然法則に従って説明されるものより大なる信を置くところの性癖 (Hang) である”¹⁴とされる。すなわち、想像力と感情によって形成された主観的な観念を経験に基づくところの客観的観念と取り違えるところに迷信がある。

迷信には、物理的迷信と道徳的迷信があるとされているが、祭祀は道徳的意味での迷信的行為である。¹⁵また、迷信的思考法は妄想 (Wahn) であるとされる。“妄想とは、ある事柄 (Sache) のたんなる表象 (Vorstellung) を事柄それ自体と同等なるものとして考えるところの欺瞞 (Täuschung) である。”¹⁶妄想は、主観的想像 (表象) を客観的現実に対応するものあるいは現実を生み出す手段と考えるところにある。前者の例として、占星術が挙げられ“もし、星の組み合わせあるいは遊星の位置が、人間の運命に関する天空の寓意文字として (占星術において) 表象されるならば、

天文学は子供じみたものとなる”¹⁷と言われている。後者の例として祭祀が挙げられる。カントは、祭祀に関して“全く自然的な手段 (ganz natürliches Mittel) によって、超自然的な結果を齎すもの”¹⁸あるいは“単に物理的な手段 (bloß physisches Mittel) と道徳的効果を齎す原因の間には、なんら結びつきはない”¹⁹とのべている。すなわち、祭祀は単なる物理的運動であり、そこには精神的・道徳的な意味が欠如しているとするのである。したがって、祭祀によって神の意を迎えることなどは、問題外のこととなる。祭祀を無意味なたんなる物理的運動であるとするところには、辛辣な批判の意がある。

しかし、祭祀は単に物理的運動として、道徳的に無記なるものではなく、むしろ道徳に反する。なぜならば、祭祀を行う者は、道徳的労を取ろうとすること無しに、神による恩恵を得ようと意図するからである。『宗教論』第一編の「一般的注解」において、「恩恵(を求め (die Gunstbewerbung) 宗教) についてのべられている。“人は、全ての宗教を恩恵を求める宗教 (単なる祭祀の宗教) と道徳的宗教、すなわちよき行為の宗教に分けることが出来る。前者によると人はあつかましくも次のように言う。人は、よき人間になる必要なしに (罪責の赦免によって) 神により、永遠に幸せになる。あるいは、このことが可能でないと思われる場合には [よき人間でなければ人は幸せになれないとするならば]、ただ祈願するのみで、それ以外のことをする必要なしに、神は人をよき人間にすることが出来るのである。このように言うのである。……もし、よい人間なることが、単なる願いで達成されるならば、全ての人は善人となるであろう。”²⁰祭祀的行為において、人は、よい人間となろうとする意志なしに、すなわち道徳的意志なしに、免罪が成立したり、救済に相応するよき人間となることを期待するのである。祭祀においては、このような‘恩恵 (Gunst)’ が意図されている。すな

わち、祭祀においては、純粹な神への信仰ではなく、何らかの恩恵を期待しての信仰がある。道徳的命法の観点からするならば、なんらかの功利的意図のために善とみえる行為を行うところの仮言的命法 (der hypothetische Imperativ) の論理によっているのである。²¹ 一見、極めて宗教的に見えても、恩恵を求める意図が存するならば、それは祭祀的なものに他ならない。例えば、“犠牲的行為 (贖罪・苦行・巡礼等)”²² は、厳しさを要求するのであるが、道徳的意図が無ければ意味が無いのであり、“このような自己を苦しめる行為が無益なものであり、人間の道徳的改善を目指していなければ、それだけそれは神聖 (heilig) に見えるのである。”²³ 何らかの行為が、外見的に宗教的感情に溢れているからと言って、それは正当化されるものではない。しかし、人は、誤って、単なる苦行が宗教的に正当であるかに思うのである。カントによると、この意味では、未開民族とヨーロッパの高位聖職者・ピューリタンとの間には原理上 (im Prinzip) 隔たりは無いとする。²⁴

3. 道徳的宗教

以上のように恩恵を求める仮言的命法の論理を持つ祭祀は批判されるのであるが、どのような信仰形態が正しいものとされるのであろうか。先に紹介した、恩恵を求める宗教と道徳的宗教の区分に関しての引用に続いて、以下のように述べられている。“道徳的宗教によると、次のような原則がある。全ての人は、よき人間となるためには自己の力の限りを尽くさなければならない。自己の才能を埋もらせることなく善への根源的素質を使う限りにおいて、自己の能力の至らなさが高い力の助けによって補われるであろうことを希望することが出来る。”²⁵

祭祀的行為のように、道徳とは関係の無いあるいは道徳に反する行為によっては、神の意は得られないのであって、自己の能力を尽くす限りにおいて、自己の力では達成できな

いものを神が助け補うのである。すなわち、神意が得られることとなる。『宗教論』の第一編・第二編では、人間における根本悪 (das radikale Böse) が問題とされている。人間は道徳的たらんとしても、ほとんど人間に生得的と思える根本悪のゆえに挫折する。それでは、人間は諦めてよいのであろうか。道徳的行為は無意味であるとして、むしろ恩恵を求める祭祀に赴くべきなのであろうか。カントはこの方向には救済を見ない。言い換えれば、根本悪からの解放を見ない。人間の力で道徳的完成を見ることが出来ないことを知りつつ、尚、道徳的であらうとすること、この態度のみが神の意に適うのであり、神の助力を得ることが出来る道であるとされるのである。この論理は『宗教論』の各所で見られる。²⁶ カントは、聖書に言及し、“狭き門 (die enge Pforte)” は道徳的行為を意味すると見る。²⁷

カントが、祭祀的行為を批判したのは、それが道徳的ではないからであった。祭祀的行為は、恩恵を求めるものであり、道徳的には仮言的命法に従っている。カントが肯定する道徳的行為には、ひたすら道徳的であることが求められる。すなわち、定言的命法 (der kategorische Imperativ) に従うことが要求される。²⁸ ここには、行為に対して何らかの恩恵や報酬を求める意識は無く、ひたすら無心に道徳的であらうとする意志がある。人は、自己の力のみでは、道徳的であることは出来ずに、多くの挫折がある。それにもかかわらず、努力するとき自己の外から、宗教的助力がなされると言うのである。カントは、このような宗教的あり方を真の宗教 (die wahre Religion)²⁹・純粹な理性宗教 (die reine Vernunftreligion)³⁰・道徳的宗教 (die moralische Religion)³¹・道徳的信仰 (der moralische Glaube)³²・反省的 (reflektierend)³³ 信仰などと呼んでいる。

理性宗教あるいは道徳的宗教と言う言葉に惑わされて、宗教そのものが理性的で道徳的

であるかのように誤解してはならない。理性宗教や道徳的宗教で意味されている‘理性的・道徳的’ということは、宗教的であることの出発点として‘理性的・道徳的’であることであり、理性的・道徳的であることと宗教的であることが同一視されているのではない。人が、道徳的であろうと力を尽くす限りにおいて、道徳的意志とは全く異なる次元から宗教的力が働くのであって、道徳と宗教が異なることは明白である。宗教的力は、いわゆる宗教的経験において働いていると考えられる。

祭祀的宗教と道徳的宗教を考えると、恩恵 (Gunst) と恩寵 (Gnade) を区別する必要がある。恩恵とは、祭祀的行為における人の功利的願望を神が好意的に受け入れ応えるものと考えられる。したがって、神の恩恵は超自然的なものと考えられる。カントは、恩恵を求める行為、またはその行為による恩恵の実現を‘自然’と比較して次のように述べている。“人間が、自由の法則にしたがって自らなすところの善は、超自然的な助力 (die übernatürliche Beihilfe) によって可能である能力と比較するとき、恩寵と区別して自然と名づけることが出来る。”³⁴あるいは次のように言われる。“(少なくとも教会では) 自然と恩寵の語を次のように使う。人間の徳の原理に従ってなされるものは、自然と名づけられ、道徳的欠陥を補うのに役に立ち、また、人間は道徳的完全性を義務としている故に、欲せられ望まれるものは恩寵と名づけられる。”³⁵恩寵は、自然的 (理性的) 道徳的次元とは異なった次元に属するものとされている。そして、超自然的恩寵は道徳的経路を通してはじめて得られるのである。人はしばしば、道徳的でない祭祀的行為を通して神の恩恵を得ようとするのであるが、この行為は決して神の意を得ることは無い。したがって、祭祀的行為は‘妄想’なのである。超自然的に恩恵が与えられることは無い。なお、カントは‘恩寵’と言う語を‘恩恵’の意にも使っている。

一般には恩寵には功利的願望を叶えるという恩恵の意味もあるからである。

道徳的宗教によって主張されているところを掘り下げて考察する。宗教と言うものは、そもそも‘救済’を目的とするならば、感性的欲望を背景とする祭祀ではなく、道徳的宗教において初めてその目的が達成されるのである。『宗教論』第一編の「一般的注解」において、人間の根源的道徳的素質 (die urspürngliche moralische Anlage) について言及されており、人間の自然的欲求に逆らって、この素質が人間の中に働き出でると言う。³⁶第三篇の冒頭では、道徳的意志を持つものは“悪の原理の支配からの自由 (die Befreiung)”³⁷を目的とするといわれる。道徳的であろうとすることは、感性的欲望の支配から自由にならんとすることである。そもそも、道徳的法則の形成ならびに道徳的意志の行使は、意志の自由に基づくことは、カントの道徳論で主張されているところである。祭祀的行為によって苦境から抜け出ようとする者も、求めるものが恩恵としての感性的欲望の対象であるならば、たとえ恩恵が与えられたにしても、結局は感性的世界に閉じ込められているのであって、自由ではない。事実上は、祭祀的思考法は妄想であり、恩恵が与えられることなく、願望は満たされること無く‘救済’は実現されない。祭祀的信仰は賦役信仰 (Fronglaube) とも呼ばれている。“道徳的信仰は自由な純粋な精神性に基づいたものでなければならぬ。賦役信仰は、全く道徳的価値を持たない (祭祀の) 行為によって、すなわち単に恐怖 (Furcht) と希望 (Hoffnung) に強制された行為によって—それは悪人でもなすことが出来るが—、神意に適うことができると思うのである。”³⁸道徳的信仰を持つものは、自由 (救済) へと向かうのであるが、祭祀的行為をなすものは、恐怖に支配された奴隷信仰と言うべき状態にある。救済からは程遠いのである。

4. 結論

カントによっては、法規的典札としての祭祀に対して真の理性的・道徳的宗教の立場が主張されるのである。以上、語句的、内容的説明を行ってきたが、なお、二つの問題に簡単に触れておきたい。

1) 普遍的宗教の概念について

理性的宗教・道徳的宗教ということでは、理性的・道徳的考え方・実践の先に、宗教的世界が展開すると言うことで、宗教そのものが理性的・道徳的であるというのではない。しかし、ここでの宗教の働きは、道徳的实践を推進し、人間を挫折から救済することによって、人間精神に全体的調和を齎すと言う観点から、宗教が広い意味で理性的であるということが言えるのではないか。

カントは、教会が人を欺いて支配することを指摘した上で次のように述べる。“この際、しかしながら、人々が、教会の偽善に馴れるということは、逆に人々の誠実性と信義を根底から崩すことであり、市民の義務においてさえ、見せ掛けの奉仕へと向かわせ、教会が意図していたものとは正しく反対の事態を齎すのである。”³⁹ここでは、“汝の意志の格率が、常に同時に普遍的立法として妥当するように行為せよ”という純粹実践理性の根本法則 (Grundgesetz der reinen prktischen Vernunft)⁴⁰が、宗教的行為に適用されている。すなわち、宗教的行為も道徳に反するならば、自己矛盾に陥る。カントは、宗教的行為は道徳的であることによって、はじめて首尾一貫性を持つことを主張するのである。

人間性がどの人間においても同一であるとするならば、理性的宗教はどの人間にも適用されることとなろう。真の宗教・理性的宗教は唯一普遍的であろう。“ただ唯一の(真の)宗教がある。しかし、種々の信仰 (Glaubne) が存在するのである。一さらに、次のように付け加えて言うことができよう。信仰の違い

のゆえに、互いにばらばらである諸教会には、唯一にして同一の真の宗教 (eine und dieselbe wahre Religion) が見出されるのである。”⁴¹ 宗教 (Religion) と信仰 (Glaube) は次のように区別されている。“純粹な理性概念ではなく事実 (Fakta) に基づいたキリスト教的教義は、もはやキリスト教的宗教とはいえないのであり、キリスト教的信仰である。”⁴²

カントは理性に基づいた宗教は、唯一普遍的であるとしている。しかしながら現実の宗教形態は、この理念的宗教を体現しているわけではない。カントもこの事実は認めている。批判哲学の精神は、現実を直視するのである。したがって、もろもろの具体的信仰がある。しかしながら、もろもろの信仰の根底には、理念的宗教が存在する。あるいは存在すべきである。たしかにカントには、理念的宗教がキリスト教のみにおいて体現されていると言う考えが見られるものの、宗教の普遍的概念が考えられているのである。人間精神はその働き方によって、混乱もすれば調和的にもなる。祭祀的行為は人間を調和に導くことなく、混乱させ、縛り付ける。道徳的・理性的宗教によって初めて調和を獲得することが出来る。このように、宗教が客観的・普遍的に捉えられているのであり、ここには、宗教学的思考法が見られるといえよう。

2) 道徳的休暇の問題

カントに従えば、救済の条件としてあくまで道徳的意志が要請されている。道徳的であるためには‘善なる意志’を持たねばならない。⁴³しかしながら、人間は根本悪を持っているがゆえに、常に躓く。過去には罪を、現在には無力を、未来には不安を抱き、人は絶望に陥ることであろう。それにもかかわらずカントは道徳的意志を持ち続けることを要求するのである。ここには、宗教的修行の厳しさを窺わせるものがある。力の限りを尽くして修行することによって、はじめて救済あるい

は悟りに達することが出来よう。

しかし、絶望にある人間には慰めの言葉も必要なのではあるまいか。疲れ果てた人間には、休息が必要であり、休息があつて初めて道徳的行為への活力も生まれるものと考えられる。アメリカの心理学者・哲学者であるウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) は、『プラグマティズム』の中で、‘道徳的休暇 (a moral holiday)’ の問題を提起している。プラグマティズムは、アメリカの開拓精神を基調とするものであり、経験的に現実を切り開く意志を重視する。しかし、人間は挫折するのであり、道徳的意志を放棄したくなることもある。すなわち“われわれの全てには絶望のときがあり、自分が嫌になり無益な努力に飽き飽きする。……われわれは、自分の全てを投げ出し、父の首にすがりつき、水滴が川や海に流れ込むように、われわれ自身が絶対的生命の中に吸収されるような宇宙を求めているのである。”⁴⁴

道徳的挫折の時には、慰めが得られる世界観が要求されるのであるが、ジェイムズによると、この世界観は経験論的思考法によるのではなく、合理論でなければならないとする。合理論では、絶対的なるもの (the absolute) が、前提されているのであるが、“合理論者が、彼らの信念が慰めを齎すと言うことは何を意味しているのでしょうか。それは、次のことを意味している。絶対者においては、有限なる悪はすでに克服され、したがって、現在のときはあたかも永遠のごとくにみなすことが出来る。絶対者の所産たるこの世界を信じることが出来、罪の意識はなく、不安は去り、現世の責任に煩うことは無いのである。要するに、われわれは、時々、道徳的休暇をとる権利がある。”⁴⁵ 道徳的意志を前面に立てるプラグマティストとしてのジェイムズは、道徳的挫折を認めて、プラグマティズムの基調である経験論とは対照的な合理論的思考法の必要性を主張している。カントは、ジェイムズのように道徳的休暇の問題を扱っ

ていない。カントの宗教論には、あまりにも道徳的傾向が強く、根本悪について言及しながらも、道徳的挫折については注意を払っていない印象を拭い去ることは出来ない。

しかしながら、カントの思考法は‘批判的 (kritisch)’ 方法であることを思い起こさなければならない。カントは、経験論的な方法も合理論的な方法も、双方批判的に見て、真理を追究しようとしたのである。『宗教論』の第一篇では、‘善’は、人間性において先天的に存在する‘素質 (Anlage)’ であり、‘根本悪’の存在性は‘性癖 (Hang)’ によるとされ、‘善’は、その存在性に関して、より明確にされていることに注目すべきであろう。すなわち、‘善’に関して、合理論的思考法が垣間見えるのである。実は、ジェイムズも経験論的方法と合理論的方法をプラグマティックな観点から、カント的な意味で、‘批判的’に見ていると言えるのであり、双方の思考法を如何に調和的に取り入れるかという試みが『プラグマティズム』で模索されているのである。

注

カントの著作は、Karl Vorländer (Felix Meiner Verlag, Hamburg) 版に依った。

尚次のように略す。

KpV., Kritik der praktischen Vernunft

GMS., Grundlegung zur Metaphysik der Sitten

Rel., Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft

Str.d.Fak., Der Streit der Fakultäten

Anthr., Anthropologie in pragmatistischer Absicht

1 村野宣男, 「カントの宗教批判—迷信について—」, 文教大学女子短期大学部研究紀要, 第49集, 2006.

2 Rel., 187-8.

3 Gerhard Wahrig, *Deutsches Wörterbuch*, Bertelsmann Lexikon Institut, 2000.

4 DUDEN, *Das große Wörterbuch der deutschen*

Sprache, Dudenverlag, 1999.Band 8.

- 5 カント全集, 第9巻『宗教論』, 理想社, 昭和49年, 飯島宗享訳.
- 6 カント著作集5, 『イマヌエルカント宗教哲学』岩波書店, 昭和14年, 安倍能成訳.
- 7 カント全集10, 『単なる理性の限界内の宗教』, 岩波書店, 1998, 北岡武司訳.
- 8 Rel.,195-6.
- 9 *ibid.*,200.
- 10 *ibid.*,207.
- 11 『新カトリック大事典』Ⅱ, 学校法人上智学院新カトリック大事典編纂委員会編, 研究社, 1998.
- 12 Rel.,92.
- 13 *ibid.*,195
- 14 Str.d Fak.,64注.
- 15 *ibid.*,64注.
- 16 Rel.,187注 “この性癖は、物理的なものにも、道徳的なものにも存する”.
- 17 Anthr.,102-3.
- 18 Rel.,199.
- 19 *ibid.*,201.
- 20 *ibid.*,56-7.
- 21 Kpv.,22.
- 22 Rel.,189.
- 23 *ibid.*,189.
- 24 *ibid.*,197-8.
- 25 *ibid.*,57.
- 26 *ibid.*,159,192,214,217.
- 27 *ibid.*,178.
- 28 Kpv.,22.
- 29 Rel.,92,113,117.
- 30 *ibid.*,120.
- 31 *ibid.*,56,92,121.
- 32 *ibid.*,120,122,123.
- 33 *ibid.*,58.
- 34 *ibid.*,215.
- 35 *ibid.*,194-5.
- 36 *ibid.*,53-4.
- 37 *ibid.*,99.
- 38 *ibid.*,127.

39 *ibid.*,203.

40 *ibid.*,36.

41 *ibid.*,117.

42 *ibid.*,182.

43 GMS.,Erster Abschnitt.

44 William James, *Pragmatism, The Works of William James*, Harvard University Press. 1975, p.140.

45 *ibid.*,41.